足跡

石川啄木

青空文庫

冬の長い国のことで、物蔭にはまだ雪が残つて居り、村端の溝に芹の葉一片青んではゐないが、晴れた空はそことなく霞んで、雪消の路の泥濘の処々乾きかゝつた上を、春めいた風が薄ら温かく吹いてゐた。それは明治四十年四月一日のことであつた。

新学年始業式の日なので、S村尋常高等小学校の代用教員、千早健は、平生より少し早目に出勤した。白墨の粉に汚れた木綿の紋付に、裾の擦切れた長目の袴を穿いて、クリ〳〵した三分刈の頭に帽子も冠らず——渠は帽子も有つてゐなかつた。——亭乎とした体を真直にして玄関から上つて行くと、早出の生徒は、毎朝、控所の彼方此方から駆けて来て、敬しく渠を迎へる。中には態々渠に叩頭をする許りに、其処に待つてゐるのもあつた。その朝は殊に其数が多かつた。平生の三倍も四倍も……遅刻勝な成績の悪い児の顔さへ其中に交つてゐた。健は直ぐ、其等の心々に溢れてゐる進級の喜悦を想うた。そして、何がなく心が曇つた。

渠はその朝解職願を懐にしてゐた。

職員室には、十人許りの男女——何れも穢い扮装をした百姓達が、物に怖えた様にキヨロ〳〵してゐる尋常科の新入生を、一人づゝ伴れて来てゐた。職員四人分の卓や椅子、書類入の戸棚などを並べて、さらでだに狭くなつてゐる室は、其等の人数に埋められて、身動ぎも出来ぬ程である。これも今来た許りと見える女教師の並木孝子は、一人で其人数を引受けて少し周章いたといふ態で、腰も掛けずに何やら急がしく卓の上で帳簿を繰つてゐた。

そして、健が入つて来たのを見ると、

『あ、先生！』

と言つて、ホツと安心した様な顔をした。

百姓達は、床板に膝を突いて、交る〳〵〝〵〵先を争ふ様に健に挨拶した。

『老婆さん、いくら探しても、松三郎といふのは役場から来た学齢簿の写しにありませんよ。』と、孝子は心持眉を顰めて、古手拭を冠つた一人の老女に言つてゐる。

『ハア。』と老女は当惑した様に眼をしよぼつかせた。

『無い筈はないでせう。尤も此辺では、戸籍上の名と家で呼ぶ名と違ふのがありますよ。』と、健は喙を容れた。そして老女に、

『芋田の鍛冶屋だつたね、婆さんの家は？』

『ハイ。』

『いくら見てもありませんの。役場にも松三郎と届けた筈だつて言ひますし……』と孝子はまた初めから帳簿を繰つて、『通知書を持つて来ないもんですから、薩張分りませんの。』

『可怪いなア。婆さん、役場から真箇に通知書が行つたのかい？子供を学校に出せといふ書付が？』

『ハイ。来るにア来ましたども、弟の方のな許りで、此児（と顎で指して、）のなは今年ア来ませんでなす。それでハア、持つて来なごあんさす。』

『今年は来ない？　何だ、それぢや其児は九歳か、十歳かだな？』

『九歳。』と、その松三郎が自分で答へた。膝に補布を当てた股引を穿いて、ボロ〳〵の布の無尻を何枚も〳〵着膨れた、見るから腕白らしい児であつた。

『九歳なら去年の学齢だ。無い筈ですよ、それは今年だけの名簿ですから。』

『去年ですか。私は又、其点に気が付かなかつたもんですから……』と、孝子は少しきまり悪気にして、其児の名を別の帳簿に書入れる。『それぢや何だね、』と、健は再老女の方を向いた。『此児の弟といふのが、今年八歳になつたんだらう。』

『ハイ。』

『何故それは伴れて来ないんだ?』

『ハイ。』

『ハイぢやない。此児は去年から出さなけれアならないのを、今年まで延したんだらう。其※風ぢや不可い、兄弟一緒に寄越すさ。遅く入学さして置いて、卒業もしないうちから、子守をさせるの何のつて下げて了ふ。其※風だから、此辺の者は徴兵に採られても、大抵上等兵にも成らずに帰つて来る。』

『ハイ。』

『親が悪いんだよ。』

『ハイ。そでごあんすどもなす、先生様、兄弟何方も一年生だら、可笑ごあんすべアすか?』

と、老女は黒漿の落ちた歯を見せて、テレ隠しに追従笑ひをした。

『構うもんか。弟が内務大臣をして兄は田舎の郡長をしてゐた人さへある。一緒な位何でもないさ。』

『ハイ。』

『婆さんの理屈で行くと、兄が死ねば弟も死なゝけれアならなくなる。俺の姉は去年死んだけれども俺は恁うして生きてゐる。然うだ。過日死んだ馬喰さんは、婆さんの同胞だつていふぢやないか?』

『アツハヽヽ。』と、居並ぶ百姓達は皆笑つた。

『婆さんだつて其通りチヤンと生きてゐる。ハヽヽ。兎に角弟の方も今年から寄越すさ。明日と明後日は休みで、四日から授業が始まる。その時此児と一緒に。』

『ハイ。』

『真箇だよ。寄越さなかつたら俺が迎ひに行くぞ。』

さう言ひながら立ち上つて、健は孝子の隣の卓に行つた。

『お手伝ひしませう。』

『済みませんけれども、それでは何卒。』

『アもう八時になりますね。』と、渠は孝子の頭の上に掛つてゐる時計を見上げた目を移して、障子一重で隔てた宿直室を、顎で指した。『まだ顔を出さないんですか?』

孝子は笑つて点頭いた。

その宿直室には、校長の安藤が家族——妻と二人の小供——と共に住んでゐる。朝飯の準備が今漸々出来たところと見えて、茶碗や皿を食卓に並べる音が聞える。無精者の細君は何やら呟々小供を叱つてゐた。

新入生の一人々々を、学齢児童調書に突合して、健はそれを学籍簿に記入し、孝子は新しく出席簿を拵へる。何本を買はねばならぬかとか、石盤は石石盤が可いか紙石盤が可いかとか、塗板も有たせねばならぬかとか、父兄は一人々々同じ様な事を繰返して訊く。孝子は一々それに答へる。すると今度は健の前に叩頭をして、小供の平生の行状やら癖やら、体の弱い事などを述べて、何分よろしくと頼む。新入生は後から〳〵と続いて狭い職員室に溢れた。

忠一といふ、今度尋常科の三年に進んだ校長の長男が、用もないのに怖々しながら入つて来て、甘える様の姿態をして健の卓に倚掛つた。

『彼方へ行け、彼方へ。』

と、健は烈しい調子で、隣室にも聞える様に叱つた。

『ハ。』

と言つて、猾さうな、臆病らしい眼付で健の顔を見ながら、忠一は徐々と後退りに出て行つた。為様のない横着な児で、今迄健の受持の二年級であつたが、外の教師も生徒等も、校長の子といふのでそれとなく遠慮してゐる。健はそれを、人一倍厳しく叱る。五十分の授業の間を教室の隅に立たして置くなどは珍しくもない事で、三日に一度は、罰として放課後の教室の掃除当番を吩付ける。其※時は、無精者の母親がよく健の前へ来て、抱いてゐる梅ちやんといふ児に胸を披けて大きい乳房を含ませながら、

『千早先生、家の忠一は今日も何か悪い事しあんしたべすか？』

などゝ言ふことがある。

『ハ。忠一さんは日増に悪くなる様ですね。今日も権太といふ小供が新らしく買つて来た墨を、自分の机の中に隠して知らない振してゐたんですよ。』

『コラ、彼方へ行け。』と、校長は聞きかねて細君を叱る。

『それだつてなす、毎日悪い事許りして千早先生に御迷惑かける様なんだハンテ、よくお聞き申して置いて、後で私もよツく吩付けて置くべと思つてす。』

健は平然として卓隣りの秋野といふ老教師と話を始める。校長の妻は、まだ何か言ひたげにして、上吊つた眉をピリ〳〵させながら其処に立つてゐる。然うしてるところへ、掃除が出来たと言つて、掃除監督の生徒が通知に来る。

『黒板も綺麗に拭いたか？』

『ハイ。』

『先生に見られても、少しも小言を言はれる点が無い様に出来たか？』

『ハイ。』

『若し粗末だつたら、明日また為直させるぞ。』

『ハイ。立派に出来ました。』

『好し。』と言つて、健は莞爾して見せる。『それでは一同帰しても可い。お前も帰れ。それからな、今先生が行くから忠一だけは教室に残つて居れと言へ。』

『ハイ。』と、生徒の方も嬉しさうに莞爾して、活溌に一礼して出て行く。健の恁※訓導方は、尋常二年には余りに厳し過ると他の教師は思つてゐた。然しその為に健の受持の組は、他級の生徒から羨まれる程規律がよく、少し物の解つた高等科の生徒などは、何彼につけて尋常二年に笑はれぬ様にと心懸けてゐる程であつた。

軈て健は二階の教室に上つて行く。すると、校長の妻は密乎と其後を跟けて行つて、教室の外から我が子の叱られてゐるのを立聞する。意気地なしの校長は校長で、これも我が子の泣いてゐる顔を思ひ浮べながら、明日の教案を書く……

健が殊更校長の子に厳しく当るのは、其児が人一倍悪戯に長けて、横着で、時にはその生先が危まれる様な事まで為出かす為には違ひないが、一つは渠の性質に、其※事をして或る感情の満足を求めると言つた様な点があるのと、又、然うする方が他の生徒を取締る上に都合の好い為でもあつた。渠が忠一を虐めることが厳しければ厳しい程、他の生徒は渠を偉い教師の様に思つた。

そして、女教師の孝子にも、健の其※行動が何がなしに快く思は

れた。時には孝子自身も、人のゐない処へ忠一を呼んで、手厳しく譴めてやることがある。それは孝子にとつても或る満足であつた。

　孝子は半年前に此学校に転任して来てから、日一日と経つうちに、何処の学校にもない異様な現象を発見した。それは校長と健との妙な対照で、健は自分より四円も月給の安い一代用教員に過ぎないが、生徒の服してゐることから言へば、健が校長の様で、校長の安藤は女教師の自分よりも生徒に侮られてゐた。孝子は師範女子部の寄宿舎を出てから二年とは経たず、一生を教育に献げようとは思はぬまでも、授業にも読書にもまだ相応に興味を有つてる頃ではあり、何処か気性の確固した、判断力の勝つた女なので、日頃校長の無能が女ながらも歯痒い位。殊にも、その妻のだらしの無いのが見るも厭で、毎日顔を合してゐながら、碌そつぽ口を利かぬことさへ珍しくない。そして孝子には、万事に生々とした健の烈しい気性――その気性の輝いてゐる、笑ふ時は十七八の少年の様に無邪気に、真摯な時は二十六七にも、もつと上にも見える渠の眼、（それを孝子は、写真版などで見た奈勃翁の眼に肖たと思つてゐた。）――その眼が此学校の精神でゞもあるかの様に見えた。健の眼が右に動けば、何百の生徒の心が右に行く、健の眼が左に動けば、何百の生徒の心が左に行く、と孝子は信じてゐた。そして孝子自身の心も、何時しか健の眼に随つて動く様になつてゐる事は、気が付かずにゐた。

　齢から言へば、孝子は二十三で、健の方が一歳下の弟である。が、健は何かの事情で早く結婚したので、その頃もう小児も有つた。そして其家が時として其日の糧にも差支へる程貧しい事は、村中知らぬ者もなく、健自身も別段隠す態も見せなかつた。或日、健は朝から浮かぬ顔をして、十分の休み毎に呟呻許りしてゐた。

『奈何なさいましたの、千早先生、今日はお顔色が良くないぢやありませんか？』

と孝子は何かの機会に訊いた。健は出かゝつた生※呻を噛んで、

『何有。』

と言つて笑つた。そして、

『今日は煙草が切れたもんですからね。』

　孝子は何とも言ふことが出来なかつた。健が平生人に魂消られる程の喫煙家で、職員室に入つて来ると、甚※事があらうと先づ煙管を取上げる男であることは、孝子もよく知つてゐた。卓隣りの秋野は其煙草入を出して健に薦めたが、渠は其日一日喫まぬ積りだつたと見えて、煙管も持つて来てゐなかつた。そして、秋野の煙管を借りて、美味さうに二三服続け様に喫んだ。孝子はそれを見てゐるのが、何がなしに辛かつた。宿へ帰つてからまで其事を思出して、何か都合の好い名儀をつけて、健に金を遣る途はあるまいかと考へた事があつた。又、去年の一夏、健が到頭古袷を着て過した事、それで左程暑くも感じなかつたといふ事なども、渠自身の口から聞いてゐたが、村の噂はそれだけではなかつた。其夏、毎晩夜遅くなると、健の家――或る百姓家を半分劃つて借りてゐた――では障子を開放して、居たたまらぬ杉の葉を燻しては、中で頻りに団扇で煽いでゐた。それは多分蚊帳が無いので、然うして蚊を逐出してから寝たのだらうといふ事であつた。其※に苦しい生活をしてゐて、渠には些とも心を痛めてゐる態がない。朝から晩まで、真に朝から晩まで、小供等を対手に怡々として暮らしてゐる。孝子が初めて此学校に来た秋の頃は、毎朝昧爽から朝飯時まで、自宅に近所の小供等を集めて「朝読」といふのを遣つてゐた。朝な〳〵、黎明の光が漸

く障子に仄めいた許りの頃、早く行くのを競つてゐる小供等――主に高等科の――が、戸外から声高に友達を呼起して行くのを、孝子は毎朝の様にまだ臥床の中で聞いたものだ。冬になつて朝読が出来なくなると、健は夜な〳〵九時頃までも生徒を集めて、算術、読方、綴方から歴史や地理、古来の偉人の伝記逸話、年上の少年には英語の初歩なども授けた。この二月村役場から話があつて、学校に壮丁教育の夜学を開いた時は、三週間の期間を十六日まで健が一人で教へた。そして終ひの五日間は、毎晩裾から吹上る夜寒を悚へて、二時間も三時間も教壇に立つた為に風邪を引いて寝たのだといふ事であつた。

それでゐて、健の月給は唯八円であつた。そして、その八円は何時でも前借になつてゐて、二十一日の月給日が来ても、いつの月でも健には、同僚と一緒に月給の渡されたことがない。四人分の受領書を持つて行つた校長が、役場から帰つて来ると、孝子は大抵紙幣と銀貨を交ぜて十二円渡される。検定試験上りの秋野は十三円で、古い師範出の校長は十八円であつた。そして、校長は気毒相な顔をしながら、健には存在な字で書いた一枚の前借証を返してやる。渠は平然としてそれを受取つて、クル〳〵と円めて火鉢に燻べる。淡い焔がメラ〳〵と立つかと見ると、直ぐ消えて了ふ。と、渠は不揃な火箸を取つて、白くなつて小く残つてゐる其灰を突く。突いて、突いて、そして上げた顔は平然としてゐる。

孝子は気毒さに見ぬ振をしながらも、健のその態度をそれとなく見てゐた。そして訳もなく胸が迫つて、泣きたくなることがあつた。其※時は、孝子は用もない帳簿などを弄つて、人後まで残つた。月給を貰つた為に怡々して早く帰るなどと、思はれたくなかつたのだ。

孝子の目に映つてゐる健は、月給八円の代用教員ではなかつた。孝子は或る時その同窓の女友達の一人へ遣つた手紙に、この若い教師のことを書いたことがある。若しや詰らぬ疑ひを起されてはといふ心配から、健には妻子のあることを詳しく記した上で、

『私の学校は、この千早先生一人の学校といつても可い位よ。奥様やお子様のある人とは見えない程若い人ですが、男生でも女生でも千早先生の言ふことをきかぬ者は一人もありません。そら、小野田教諭がいつも言つたでせう――教育者には教育の精神を以て教へる人と、教育の形式で教へる人と、二種類ある。後者には何人でも成れぬことはないが、前者は百人に一人、千人に一人しか無いもので、学んで出来ることではない、謂はば生来の教育者である――ツて。千早先生はその百人に一人しかない方の組よ。教授法なんかから言つたら、先生は乱暴よ、随分乱暴よ。今の時間は生徒と睨めツクラをして、敗けた奴を立たせることにして遊びましたよなどゝ言ふ時があります。（遊びました）といふのは嘘で、先生は其　事をして、生徒の心を散るのを御自分の一身に集るのです。さうしてから授業に取かゝるのです。偶に先生が欠勤でもすると、私が掛持で尋常二年に出ますの。生徒は決して私ばかりでなく、誰のいふことも、聞きません。先生の組の生徒は、先生のいふことでなければ聞きません。私は其　時、「千早先生はさう騒いでも可いと教へましたか？」と言ひます。すると、直ぐ静粛になつて了ひます。先生は又、教案を作りません。その事で何日だつたか、巡つて来た郡視学と二時間許り議論をしたのよ。その時の面白かつたこと？　結局視学の方が敗けて胡麻化して了つたの。

『先生は尋常二年の修身と体操を校長にやらして、その代り高等科

（校長の受持）の綴方と歴史地理に出ます。今度は千早先生の時間だといふ時は、鐘が鳴つて控所に生徒の列んだ時、その高等科の生徒の顔色で分ります。

『尋常二年に由松といふ児があります。それは生来の低脳者で、七歳になる時に燐寸を弄そんで、自分の家に火をつけて、ドン〳〵燃え出すのを手を打つて喜んでゐたといふ児ですが、先生は御自分の一心で是非由松を普通の小供にすると言つて、暇さへあればその由松を膝の間に坐らせて、（先生は腰かけて、）上から睨と見下しながら、肩に手をかけて色々なことを言つて聞かせてゐます。その時だけは由松も大人しくしてゐて、終ひには屹度メソ〳〵泣出して了ひますの。時として先生は、然うしてゐて十分も二十分も黙つて由松の顔を見てゐることがあります。二三日前でした、由松は先生と然うしてゐて、突然眼を瞑つて背後に倒れました。先生は静かに由松を抱いて小使室へ行つて、頭に水を掛けたので小供は蘇生しましたが、私共は一時喫驚しました。先生は、「私の精神と由松の精神と角力をとつて、私の方が勝つたのだ。」と言つて居られました。その由松は近頃では清書なんか人並に書く様になりました。算術だけはいくら骨を折つても駄目ださうです。

『秀子さん、そら、あの寄宿舎の談話室ね、彼処の壁にペスタロツヂが小供を教へてゐる画が掲けてあつたでせう。あのペスタロツヂは痩せて骨立つた老人でしたが、私、千早先生が由松に物を言つてるところを横から見てゐると、何といふことなくあの画を思出すことがありますの。それは先生は、無論一生を教育事業に献げるお積りではなく、お家の事情で当分あゝして居られるのでせうが、私は恁※人を長く教育界に留めて置かぬのが、何より残念な事と思ひます。先生は何か人の知らぬ大きな事を考へて居られる様ですが、私共には分りません。然しそのお話を聴いてゐると、常々私共の行きたい〳〵と思つてる処――何処ですか知りませんが――へ段々連れて行かれる様な気がします。そして先生は、自分は教育界獅子身中の虫だと言つて居られるの。又、今の社会を改造するには先づ小学教育を破壊しなければいけない、自分に若し二つ体があつたら、一つでは一生代用教員をしてゐたいと言つてます。奈何して小学教育を破壊するかと訊くと、何有ホンの少しの違ひです、人を生れた時の儘で大きくならせる方針を取れや可いんですと答へられました。

『然し秀子さん、千早先生は私にはまだ一つの謎です。何処か分らないところがあります。ですけれども、毎日同じ学校にゐて、毎日先生の為さる事を見てゐると、どうしても敬服せずには居られませんの。先生は随分苦しい生活をして居られます。それはお気毒な程です。そして、先生の奥様といふ人は、矢張好い人で、優しい、美しい（但し色は少し黒いけれど、）親切な方です。……』

と書いたものだ。実際それは孝子の思つてゐる通りで、この若い女教師から見ると、健が月末の出席歩合の調べを怠けるのさへ、コセ〳〵した他の教師共より偉い様に見えた。

が、流石は女心で、例へば健が郡視学などと揶揄半分に議論をする時とか、父の目の前で手厳しく忠一を叱る時などは、傍で見る目もハラ〳〵して、顔を挙げ得なかつた。

今も、健が声高に忠一を叱つたので、宿直室の話声が礒と止んだ。孝子は耳敏くもそれを聞付けて忠一が後退りに出て行くと、

『マア、先生は！』

と低声に言つて、口を窄めて微笑みながら健の顔を見た。

『ハヽヽヽ。』と、渠は軽く笑つた。そして、眼を円くして直ぐ前に立つてゐる新入生の一人に、

『可いか。お前も学校に入ると、不断先生の断りなしに入つては不可いといふ処へ入れば、今の人の様に叱られるんだぞ。』

『ハ。』と言つて、其児はピヨコリと頭を下げた。火傷の痕の大きい禿が後頭部に光つた。

『忠一イ。忠一イ。』と、宿直室から校長の妻の呼ぶ声が洩れた。

健と孝子は目と目で笑ひ合つた。

軈て、埃に染みた、黒の詰襟の洋服を着た校長の安藤が出て来て、健と代つて新入生を取扱かつた。健は自分の卓に行つて、その受持の教務にかゝつた。

九時半頃、秋野教師が遅刻の弁疏を為い〳〵入つて来て、何時も其室の柱に懸けて置く黒繻子の袴を穿いた時は、後から〳〵と来た新入生も大方来尽して、職員室の中は空いてゐた。健は卓の上から延び上つて、其処に垂れて居る索を続様に強く引いた。壁の彼方では勇しく号鐘が鳴り出す。今か〳〵とそれを待ちあぐんでゐた生徒等は、一しきり春の潮の湧く様に騒いだ。

五分とも経たぬうちに、今度は秋野がその鐘索を引いて、先づ控所へ出て行つた。と、健は校長の前へ行つて、半紙を八つに畳んだ一枚の紙を無造作に出した。

『これ書いて来ました。何卒宜しく願ひます。』

笑ふ時目尻の皺の深くなる、口髭の下向いた、寒さうな、人の好さ相な顔をした安藤は、臆病らしい眼付をして其紙と健の顔を見比べた。前夜訪ねて来て書式を聞いて行つたのだから、展けて見なくても解職願な事は解つてゐる。

そして、妙に喉に絡まつた声で言つた。

『然うでごあんすか。』

『は。何卒。』

綴ぢ了へた許りの新しい出席簿を持つて、立ち上つた孝子は、チラリと其畳んだ紙を見た。そして、健が四月に罷めると言ふのは予々聞いてゐた為であらう、それが若しや解職願ではあるまいかと思はれた。

『何と申して可いか……ナンですけれども、お決めになつてあるのだば為方がない訳でごあんす。』

『何卒宜しく、お取り計ひを願ひます。』

と言つて健は、軽く会釈して、職員室を出て了つた。その後から孝子も出た。

控所には、級が新しくなつて列ぶべき場所の解らなくなつた生徒が、ワヤワヤと騒いでゐた。秋野は其間を縫つて歩いて、

『先の場所へ列ぶのだ、先の場所へ。』

と叫んでゐるが、生徒等は、自分達が皆及第して上の級に進んだのに、今迄の場所に列ぶのが不見識な様にでも思はれるかして、仲々言ふことを聞かない。と見た健は、号令壇を兼ねてゐる階段の上に突立つて、

『何を騒いでゐる。』

と呶鳴つた。耳を聾する許りの騒擾が、夕立の霽れ上る様にサツと収つて、三百近い男女の瞳はその顔に萃まつた。

『一同今迄の場所に今迄の通り列べ。』

ゾロ〳〵と足音が乱れて、それが鎮ると、各級は皆規則正しい二列縦隊を作つてゐた。閧乎として話一つする者がない。新入生の父

兄は、不思議相にしてそれを見てゐた。

渠は緩りした歩調で階段を降りて、秋野と共に各級をその新しい場所に導いた。孝子は新入生を集めて列を作らしてゐた。

校長が出て来て壇の上に立つた。密々と話声が起りかけた。健は背後の方から一つ咳払ひをした。話声はそれで再鎮つた。

『えゝ、今日から明治四十年度の新しい学年が始まります……』と、校長は両手を邪魔相に前で揉みながら、低い、怖々した様な声で語り出した。二分も経つか経たぬに、

『三年一万九百日。』

と高等科の生徒の一人が、妙な声色を使つて言つた。

『叱ツ。』

と秋野が制した。潜笑ひの声は漣の様に伝はつた。そして新しい密語が其に交つた。

それは恰度今の並木孝子の前の女教師が他村へ転任した時——去年の十月であつた。——安藤は告別の辞の中で「三年一万九百日」と誤つて言つた。その女教師は三年の間この学校にゐたつたのだ。それ以来年長の生徒は何時もこの事を言つては、校長を軽蔑する種にしてゐる。恰度この時、健もその事を思出してゐたので、も少しで渠も笑ひを洩らすところであつた。

密語の声は漸々高まつた。中には声に出して何やら笑ふのもある。と、孝子は草履の音を忍ばせて健の傍に寄つて来た。

『先生が前の方へ被入ると宜うございますん。』

『然うですね。』と渠も囁いた。

そして静かに前の方へ出て、階段の最も低い段の端の方へ立つた。場内はまた水を打つた様に※乎とした。

不図渠は、諸有生徒の目が、諄々と何やら話し続けてゐる校長を見てゐるのでなく、渠自身に注がれてゐるのに気が付いた。例の事ながら、何となき満足が渠の情を唆かした。そして、幽かに唇を歪めて微笑んで見た。其処にも此処にも、幽かに微笑んだ生徒の顔が見えた。

校長の話の済んで了ふまでも、渠は其処から動かなかつた。

それから生徒は、痩せた体の何処から出るかと許り高い渠の号令で、各々その新しい教室に導かれた。

四人の職員が再び職員室に顔を合せたのは、もう十一時に間のない頃であつた。学年の初めは諸帳簿の綴変へやら、前年度の調物の残りやらで、雑務が仲々多い。四人はこれといふ話もなく、十二時が打つまでも孜々とそれを行つてゐた。

『安藤先生。』

と孝子は呼んだ。

『ハ。』

『今日の新入生は合計で四十八名でございます。その内、七名は去年の学齢で、一昨年ンのが三名ございますから、今年の学齢で来たのは三十八名しかありません。』

『然うでごあんすか。総体で何名でごあんしたらう?』

『四十八名でございます。』

『否、本年度の学齢児童数は?』

『それは七十二名といふ通知でございます、役場からの。でございますから、今日だけの就学歩合では六十六、六六七にしか成りません。』

『少いな。』と校長は首を傾げた。

『何有、毎年今日はそれ位なもんでごあんす。』と、十年もこの学校にゐる土地者の秋野が喙を容れた。『授業の始まる日になれば、また二十人位ア来あんすでア。』

『少いなア。』と、校長はまた同じ事を言ふ。

『奈何です。』と健は言つた。『今日来なかつたのへ、明日明後日の中に役場から又督促さして見ては？』

『何有、明々後日になれば、二十人は屹度来あんすでア。保険付だ。』と、秋野は鉛筆を削つてゐる。

『二十人来るにしても、三十八名に二十……残部十四名の不就学児童があるぢやありませんか？』

『督促しても、来るのは来るし、来ないのは来なごあんすぜ。』

『ハハヽヽ。』と健は訳もなく笑つた。『可いぢやありませんか、私達が草鞋を穿いて歩くんぢやなし、役場の小使を歩かせるのですもの。』

『来ないのは来ないでせうなア。』と、校長は独語の様に意味のないことを言つて、卓の上の手焙の火を、煙管で突いてゐる。

『一学年は並木さんの受持だが、御意見は奈何です？』

然う言ふ健の顔に、孝子は一寸薄目を与れて、

『それア私の方は……』

と言出した時、入口の障子がガラリと開いて、浅黄がゝつた縞の古袷に、羽織も着ず、足袋も穿かぬ小造りの男が、セカ〳〵と入つて来た。

『やあ、誰かと思つたば東川さんか。』と、秋野は言つた。

『其※に喫驚する事はねえさ。』

然う言ひながら東川は、型の古い黒の中折を書類入の戸棚の上に載せて、

『やあお急しい様でごあんすな。好いお天気で。』

と、一同に挨拶した。そして、手づから椅子を引寄せて、遠慮もなく腰を掛け、校長や秋野と二言三言話してゐたが、何やら気の急ぐ態度であつた。その横顔を健は昵と凝視めてゐた。齢は三十四五であるが、頭の頂辺が大分円く禿げてゐて、左眼が潰れた眼の上に度の強い近眼鏡をかけてゐる。小形の鼻が尖つて、見るから一癖あり相な、抜目のない顔立である。

『時に、』と、東川は話の断目を待構へてゐた様に、椅子を健の卓に向けた。『千早先生。』

『何です？』

『実は其用で態々来たのだがなす、先生、もう出したすか？　未だすか？』

『何をです？』

『何をツて。其※に白ばくれなくても可ごあんすべ。出したすか？　出さねえすか？』

『だから何をさ？』

『解らない人だなア。辞表をす。』

『あゝ、その事ですか。』

『出したすか？　出さねえすか？』

『何故？』

『何故ツて。用があるから訊くのす。』

よくツケ〳〵と人を圧迫ける様な物言をする癖があつて、多少の学識もあり、村で健が友人扱ひをするのは此男の外に無かつた。若い時は青雲の夢を見たもので、機会あらば宰相の位にも上らうとい

ふ野心家であつたが、財産のなくなると共に徒らに村の物笑ひになつた。今では村会議員に学務委員を兼ねてゐる。

『出しましたよ。』と、健は平然として答へた。

『真箇すか？』と東川は力を入れる。

『ハヽヽヽ。』

『だハンテ若い人は困る。人が甚※に心配してるかも知らないで、気ばかり早くてさ。』

『それ〳〵、煙草の火が膝に落ちた。』

『これだ！』と、呆れた様な顔をしながら、それでも急いで吸殻を膝から払ひ落して、『先生、出したつても今日の事だがら、まだ校長の手許にあるベアハンテ、今の間に戻してござれ。』

『何故？』

『いやサ、詳しく話さねえば解らねえが……実はなす、』

と穏かな調子になつて、『今日何も知らねえで役場さ来てみたのす。そすると種市助役が、一寸別室、て呼ぶだハンテ、何だど思つて行つて見だば先生の一件さ。昨日逢つた時、明日辞表を出すつてゐだつけが、何しろ村教育も漸々発展の緒に就いた許りの時だのに、千早先生に罷められては誠に困る。それがと言つて今は村長も留守で、正式に留任勧告をするにも都合が悪い。何れ二三日中には村長も帰るし、七日には村会も開かれるのだから、兎も角もそれまでは是非待つて貰ひたいと言ふのでなす、それで畢竟は種市助役の代理になつて、今俺ア飛んで来たどころす。解つたすか？』

『解るには解つたが、……奈何も御苦労でした。』

『御苦労も糞も無えが、なす、先生、然う言ふ訳だハンテ、何卒一先戻して貰つてござれ。』

戻して貰へ、といふ、その「貰へ」といふ語が驕持心の強い健の耳に鋭く響いた。そして、適確した調子で言つた。

『出来ません、其事は。』

『それだハンテ困る。』

『御好意は充分有難く思ひますけれど、為方がありません、出して了つた後ですから。』

秋野も校長も孝子も、鳴を潜めて二人の話を聞いてゐた。

『出したと言つたところです、それが未だ学校の中にあるのだば、謂はゞ未だ内輪だけの事でアねえすか？』

『東川さん、折角の御勧告は感謝しますけれど、貴方は私の気性を御存知の筈です。私は一旦出して了つたのは、奈何あつても、譬へそれが自分に不利益であつても取戻すことは厭です。内輪だらうが外輪だらうが、私は其※事は考へません。』

然う言つた健の顔は、もう例の平然とした態に帰つてゐて、此上いくら言つたとて動きさうにない。言ひ出しては後へ退かぬ健の気性は、東川もよく知つてゐた。

東川は突然椅子を捻向けた。

『安藤先生。』

その声は、今にも喰つて掛るかと許り烈しかつた。嚇すナ、と健は思つた。

『ハ？』と言つて、安藤は目の遣場に困る程周章いた。

『先生ア真箇に千早先生の辞表を受取つたすか？』

『ハ。……いや、それでごあんすでは。今も申上げようかと思ひあんしたども、お話中に容喙するのも悪いと思つて、黙つてあんしたが、先刻その、号鐘が鳴つて今始業式が始まるといふ時、お出しに

なりあんしてなす。ハ、これでごあんす。』と、硯箱の下から其解職願を出して、『何れ後刻で緩りお話しようと思つてあんしたつども、今迄その暇がなくて一寸此処にお預りして置いた訳でごあんす。何しろ思懸けないことでごあんしてなす。ハ。』

「その書式を教へたのは誰だ？」と健は心の中で嘲笑つた。

『然うすか、解職願お出しエんしたのすか？　俺ア少しも知らなごあんしたオなす。』と、秋野は初めて知つたと言ふ態に言つた。

『千早先生も又、甚※御事情だかも知れねえども、今急にお罷めアねえくとも宜うごあんすべアすか？』

『安藤先生、』と東川は呼んだ。『そせば先生も、その辞表を一旦お戻しやる積りだつたのだなす？』

『ハ、然うでごあんす。何れ後刻でお話しようと思つて、受取つた訳でアごあんせん、一寸お預りして置いただけでごあんす。』

『お戻しやれ、そだら。』と、東川は命令する様な調子で言つた。

『お戻しやれ、お聞きやつた様な訳で、今それを出されでア困りあんすでば。』

『ハ。奈何せ私も然う思つてだのでごあんすアハンテ、お戻しすあんす。』と、顔を曇らして言つて、頬を凹ませてヂウ〳〵する煙管を強く吸つた。戻すも具合悪く、戻さぬも具合悪いといつた態度である。

健は横を向いて、煙草の煙をフウと長く吹いた。

『お戻しやれ、俺ア学務委員の一人として勧告しあんす。』

安藤は思切り悪く椅子を離れて、健の前に立つた。

『千早さん、先刻は急しい時で……』と諄々弁疏を言つて、『今お聞き申して居れば、役場の方にも種々御事情がある様でごあんすゝ、一寸お預りしただけでごあんすから、兎に角これはお返し致しあんす。』

然う言つて、解職願を健の前に出した。その手は顫へてゐた。

健は待つてましたと言はぬ許りに急に難しい顔をして、霎時、眤と校長の揉手をしてゐるその手を見てゐた。そして言つた。

『それでは、直接郡役所へ送つてやつても宜うございますか？』

『これはしたり！』

『先生。』『先生。』と、秋野と東川が同時に言つた。そして東川は続けた。

『然うは言ふもんでアない。今日は俺の顔を立てゝ呉れても可いでアねえすか？』

『ですけれど……それア安藤先生の方で、お考へ次第進達するのを延さうと延すまいと、それは私には奈何も出来ない事ですけれど、私の方では前々から決めてゐた事でもあり、且つ、何が何でも一旦出したのは、取るのは厭ですよ。それも私一人の為めに村教育が奈何の恁うのと言ふのではなし、却てお邪魔をしてる様な訳ですからね。』と言つて、些と校長に流眄を与れた。

『マ、マ、然うは言ふもんでア無えでばサ。前々から決めておいた事は決めて置いた事として、茲はマア村の頼みを訊いて呉れても可いでアねえすか？　それも唯、一週間か其処いら待つて貰ふだけの話だもの。』

『兎に角お返ししあんす。』と言つて、安藤は手持無沙汰に自分の卓に帰つた。

『安藤先生。』と、東川は再喰つて掛る様に呼んだ。『先生もまた、も少し何とか言方が有りさうなもんでアねえすか？　今の様でア、

宛然俺に言はれた許りで返す様でアねえすか？　先生には、千早先生が何れだけこの学校に要のある人だか解らねえすか？』

『ハ？』と、安藤は目を怖々さして東川を見た。意気地なしの、能力の無い其顔には、あり〳〵と当惑の色が現れてゐる。

と、健は、然うして擦つた揉んだと果しなく評つてるのが、――校長の困り切つてるのが、何だか面白くなつて来た。そして、ツと立つて、解職願を再校長の卓に持つて行つた。

『兎に角これは貴方に差上げて置きます。奈何なさらうと、それは貴方の御権限ですが……』

と言ひながら、傍から留めた秋野の言葉は聞かぬ振をして、自分の席に帰つて来た。

『困りあんしたなア。』と、校長は両手で頭を押へた。

眇目の東川も、意地悪い興味を覚えた様な顔をして、黙つてそれを眺めた。秋野は煙管の雁首を見ながら煙草を喫んでゐる。

と、今迄何も言はずに、四人の顔を見巡してゐた孝子は、思切つた様に立上つた。

『出過ぎた様でございますけれども……アノ、それは私がお預り致しませう。……千早先生も一旦お出しになつたのですから、お厭でせうし、それでは安藤先生もお困りでせうし、お役場には又、御事情がお有りなのですから……』と、心持息を逸ませて、呆気にとられてゐる四人の顔を急しく見巡した。そして、膨りと肥つた手で静かにその解職願を校長の卓から取り上げた。

『お預りしても宜敷うございませうか？　出過ぎた様でございますけれど。』

『ハ？　ハ。それア何でごあんす……』と言つて、安藤は密と秋野の顔色を覗つた。秋野は黙つて煙管を咬へてゐる。

月給から言へば、秋野は孝子の上である。然し資格から言へば、同じ正教員でも一人は検定試験上りで、一人は女ながらも師範出だから、孝子は校長の次席なのだ。

秋野が預るとすると、男だから、且つは土地者だけに種々な関係があつて、屹度何かの反響が起る。孝子はそれも考へたのだ。そして、

『私の様な無能者がお預りしてゐると、一番安全でございます。ホヽヽヽ。』

と、取つてつけた様に笑ひながら、校長の返事も待たず、その八つ折りの紙を袴の間に挟んで、自分の席に復した。その顔はポウツと赧らんでゐた。

常にない其行動を、健は目を円くして眺めた。

『成程。』と、その時東川は膝を叩いた。『並木先生は偉い。出来した、出来した、なアる程それが一番だ。』

と言ひながら健の方を向いて、

『千早先生も、それなら可がべす？』

『並木先生。』と健は呼んだ。

『マ、マ。』と東川は手を挙げてそれを制した。『マ、これで可いでば。これで俺の役目も済んだといふもんだ。ハヽヽヽ。』

そして、急に調子を変へて、

『時に、安藤先生。今日の新入学者は何人位ごあんすか？』

『ハ？……えゝと……えゝと、』と、校長は周章いて了つて、無理に思出すといふ様に眉を萃めた。『四十八名でごあんす。然うでごあんしたなす。並木さん？』

『ハ。』

『四十八名すか？　それで例年に比べて多い方すか、少い方すか？』

話題は変つて了つた。

『秋野先生、』

と言ひながら、胡麻塩頭の、少し腰の曲つた小使が入つて来た。

『お家から迎えが来たアす。』

『然うか。何用だべな。』と、秋野は小使と一緒に出て行つた。

腕組をして昵と考込んでゐた健は、その時ツと立上つた。

『お先に失礼します。』

『然うすか？』と、人々はその顔――屹と口を結んだ、額の広い、その顔を見上げた。

『左様なら。』

健は玄関を出た。処々乾きかゝつてゐる赤土の運動場には、今年初めての黄い蝶々が二つ、フワ〳〵と縺れて低く舞つてゐる。隅の方には、柵を潜つて来た四五羽の鶏が、コツ〳〵と遊んでゐた。

太い丸太の尖を円めて二本植ゑた、校門の辺へ来ると、何れ女生徒の遺失したものであらう、小さい赤櫛が一つ泥の中に落ちてゐた。健はそれを足駄の歯で動かしてみた。櫛は二つに折れてゐた。

健が一箇年だけで罷めるといふのは、渠が最初、知合の郡視学に会つて、昔自分の学んだ郷里の学校に出てみたい、と申込んだ時から、その一箇年の在職中も、常々言つてゐた事で、又、渠自身は勿論、渠を知つてゐるだけの人は、誰一人、健を片田舎の小学教師などで埋もれて了ふ男とは思つてゐなかつた。小い時分から覇気の壮んな、才気に溢れた、一時は東京に出て、まだ二十にも足らぬ齢で著書の一つも出した渠――その頃数少き年少詩人の一人に、千早林鳥の名のあつた事は、今でも記憶してゐる人も有らう。――が、侘しい百姓村の単調な其日々々を、朝から晩まで、熱心に、又楽し相に、育ち卑しき涕垂しの児女等を対手に送つてゐるのは、何も知らぬ村の老女達の目にさへ、不思議にも詰らなくも見えてゐた。

何れ何事かやり出すだらう！　それは、その一箇年の間の、四周の人の渠に対する思惑であつた。

加之、年老つた両親と、若い妻と、妹と、生れた許りの女児と、それに渠を合せて六人の家族は、いかに生活費の費らぬ片田舎とは言へ、又、倹約家の母がいかに倹つてみても、唯八円の月給では到底喰つて行けなかつた。女三人の手で裁縫物など引受けて遣つてもゐたが、それとても狭い村だから、月に一円五十銭の収入は覚束ない。

そして、もう六十に手の達いた父の乗雲は、家の惨状を見るに見かねて、それかと言つて何一つ家計の補助になる様な事も出来ず、若い時は雲水もして歩いた僧侶上りの、思切りよく飄然と家出をして了つて、この頃漸く居処が確まつた様な状態であつた。

健でないにしたところが、必ず、何かもつと収入の多い職業を見付けねばならなかつたのだ。

『健や、四月になつたら学校は罷めて、何処さか行ぐべアがな？』と、渠の母親――背中の方が頭よりも高い程腰の曲つた、極く小柄な渠の母親は、時々心配相に恁う言つた。

『あゝ、行くさ。』と、其度渠は恁※返事をしてゐた。

『何処さ？』

『東京。』

東京へ行く！　行つて奈何する？　渠は以前の経験で、多少は其

名を成してゐても、詩では到底生活されぬ事を知つてゐた。且つは又、此頃の健には些とも作詩の興がなかつた。

小説を書かう、といふ希望は、大分長い間健の胸にあつた。初めて書いてみたのは、去年の夏、もう暑中休暇に間のない頃であつた。『面影』といふのがそれで、昼は学校に出ながら、四日続け様に徹夜して百四十何枚を書了へると、渠はそれを東京の知人に送つた。十二三日経つて、原稿はその儘帰つて来た。また別の人に送つて、また帰つて来た。三度目に送る時は、四銭の送料はあつたけれども、添へてやる手紙の郵税が無かつた。健は、何十通の古手紙を出してみて、漸々一枚、消印の逸れてゐる郵券を見つけ出した。そしてそれを貼つて送つた。或雨の降る日であつた。妻の敏子は、到頭金にならなかつた原稿の、包紙の雨に濡れたのを持つて、渠の居間にしてゐる穢しい二階に上つて来た。

『また帰つて来たのか？　アハヽヽヽ。』

と渠は笑つた。そして、その儘本箱の中に投げ込んで、二度と出して見ようともしなかつた。

何時の間にか、渠は自信といふものを失つてゐた。然しそれは、渠自身も、四周の人も気が付かなかつた。

そして、前夜、短い手紙でも書く様に、何気なくスラスラと解職願を書きながらも、学校を罷めて奈何するといふ決心はなかつたのだ。

健は、例の様に亭乎とした体を少し反身に、確乎した歩調で歩いて、行き合ふ児女等の会釈に微笑みながらも、始終思慮深い眼付をして、

「罷めても食へぬし、罷めなくても食へぬ……。」

と、その事許り思つてゐた。

家へ入ると、通し庭の壁側に据ゑた小形の竈の前に小さく蹲んで、干菜でも煮るらしく、鍋の下を焚いてゐた母親が、

『帰つたか。お腹が減つたつたべアな？』

と、強ひて作つた様な笑顔を見せた。今が今まで我家の将来でも考へて、胸が塞つてゐたのであらう。

縞目も見えぬ洗晒しの双子の筒袖の、袖口の擦切れたのを着てゐて、白髪交りの頭に冠つた浅黄の手拭の上には、白く灰がかゝつてゐた。

『然うでもない。』

と言つて、渠は足駄を脱いだ。上框には妻の敏子が、垢着いた木綿物の上に女児を負つて、顔にかゝるほつれ毛を気にしながら、ランプの火屋を研いてゐた。

『今夜は客があるぞ、屹度。』

『誰方？』

それには答へないで、

『あゝ、今日は急しかつた。』

と言ひながら、健は勢ひよくドン〳〵梯子を上つて行つた。

（その一、終）

（予が今までに書いたものは、自分でも忘れたい、人にも忘れて貰ひたい、そして、予は今、予にとつての新らしい覚悟を以てこの長編を書き出してみた。他日になつたら、また、この作をも忘れたく、忘れて貰ひたくなる時があるかも知れぬ。――

啄木）

〔「スバル」明治四十二年二月号〕

青空文庫情報

底本：「石川啄木全集　第三巻　小説」筑摩書房
　1978（昭和53）年10月25日初版第1刷発行
　1993（平成5年）年5月20日初版第7刷発行
底本の親本：「スバル　第二号」
　1909（明治42）年2月1日発行
初出：「スバル　第二号」
　1909（明治42）年2月1日発行
入力：Nana ohbe
校正：川山隆
2008年10月18日作成
2012年9月17日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

足跡

石川啄木

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/